「忘れてしまうこと・忘れてはならないこと」

●仏の顔も三度まで?

お釈迦様はヒマラヤの麓、北インドの釈迦国の王子として生まれました。

当時、インドは統一国家ではなく、マガダ国とコーサラ国が勢力を争っていましたが、小国だった釈迦国はこの二つの大国に挟まれて、つねに侵略の危機にありました。

釈尊が出家したあと、(つまり、政治的なバランスが変わったということになります)コーサラ国の毘瑠璃王は、大軍を連れて釈迦国を真っ直ぐに攻撃しました。

ところが、その時、釈尊は三度にわたって、軍兵の通る街道の枯れ木の下に端座し、瞑想していました。

王は礼を尽くし、何故、陽の光を遮る茂った葉の木でなく、枯れた木の下に坐るのかと尋ねます。(暑いインドでは、炎天下、陽にさらされることは尋常な行為ではないのです。)すると、

「王よ、親族の陰は涼しい」

と深い意味をこめた言葉で釈尊は返事をします。王は釈迦国を攻めるのを止めましたが、四度目は止めなかったと小部経典「聞欲経」に伝わります。

ここから、「仏の顔も三度」ということわざが生まれます。

この言い伝えによれば、釈尊の意味深い行動によって、猛る心を三度まで止めたけれど、四度目は止めることなく釈迦国の一族を滅ぼした、つまり、王国、我慢したのは毘瑠璃王です。

しかし、現行のことわざの解釈は、仏様のような温厚な方、お釈迦さまでも、非礼を許してくれるのは三度目までだという受け止めで使われ、史実の王の侵略は忘れられています。

●出来事の因縁を知る智慧

実は、この話には、さらに深い因縁があります。

毘瑠璃王の父王が若き日、釈迦族から妃を迎えたいと考え使者を送りますしかし、断れば武力にもの言わせ攻めてくるであろうコーサラ国に、王女を嫁がせるのを快く思わなかった釈迦族の王族は、一計を案じます。それは、身分の低い婢妾の女に生ませた娘を、その出生の秘密を隠して、王女だと偽って嫁がせました。

やがて、その妃とコーサラ国王との間に王子、後の毘瑠璃王が生まれ、その子が八歳の時、弓を学ぶため釈迦国に留学しますが、そこで自分は身分の低い婢妾産んだ子であることから差別を受け、はじめて出生の秘密を知ります。

この事を根に持った王子は、自分が王になった時に釈迦国を滅ぼすことを誓い、父の死後、王位を継ぐと釈迦国に出兵しました。

しかし、「遠征の時、僧にあったら兵を退けよ」というインドの故事に従い、釈尊に会うことで三度まで兵を退けました。一方、釈尊もこのような釈迦国の抱える忌まわしい因縁に思いを致し、四度目は坐ることを止めたため、軍兵によって故郷の人びとは虐殺されました。

さらに後日談があり、毘瑠璃王は兵たちと共に、七日後、川に遊行していたところで暴風雨に遭って命を落とし、宮殿は落雷のために炎上焼失したのでした。

歴史の事実を知ることは大切です。すなわち、暴力で妃を取ろうとしたことと、出生を偽って嫁がせたことへ、しかも人を差別することを認めたことへ、さらに怨みに怨みで報いたことが間接の縁となり王目身も命を落としたことなどです。これらは、因縁によって物事は起こるということを教えるものであり、歴史という因果の事実を自分たちの都合で、修正することは、「歴史修正」は愚かなことです。

記憶は忘れることで癒しは生まれますが、道理の法則、因果の教えを身につけると、忘れてはならない歴史を受け止める道が開けます「智慧あるお生き方」が恵まれますと私は学んでいます。

毎年八月になると、日本に暮らす私には、節目となる敗戦の日の総理の談話をどのように受け止めるのかということも、仏教の智慧と別のことではありません。そして、今年は、ロシアによるウクライナへの「侵略」という行為も、日本の歴史と重ねて振りかえる「智慧」あるお生き方を学びたいと思います。

●阿弥陀仏の願いを生きる

数ある大乗仏教の経典に、浄土教のよりどころとなる「無量寿経」があります。親鸞聖人は、

「それ、真実の教を顕さば、すなわち「大無量寿経」これなり」「註釈版聖典」1 135頁

とその主著「教行証文類」「教巻」に、「無量寿経」が浄土真宗の根本聖典とされています。

「無量寿経」には、迷いの私たちを、真実に目覚めさせ、救おうとする阿弥陀如来の願、誓いが四十八の本願(誓願)として説かれます。

現在の経典研究の理解によれば、この阿弥陀仏の願いとは、もともと釈尊の(ざとり)の内容である、宇宙・世界を貫く根本原理を、私たち迷いの人間に向けて分かりやすく、具体的な生き方として示されているものと言えます。

その第一と第二の願には、迷いの人間のあるべき理想像が説かれ、地獄(愚かさ)・餓鬼(貪り)・畜生(争い)という私たちの煩悩を取り除き、再び、そのような迷いのあり方に戻らせないことを計画し誓い、人々にそのような人格を育てるように願っています。

これらの願は、「無三悪趣の願」「不更悪趣の願」と呼ばれてきました。

また第三と第四の願には、不平等な社会の姿を超えたあるべき理想像が説かれ、民族や肌の色、貧富による差別をなくし、人格の価値や文化の意味をめぐる格差をなくすことを計画し誓い、人間の社会がそのように成っていくことを願っています。

これらの願は、「悪趣金色の願」「無有好醜の願」と呼ばれてきました。

●「持つこと」なのか、「成ること」なのか〜それが問題だ

経典はそれが成立し、編集された地方や時代の課題や状況を反映しています。そのため、古い言葉遣いや、その地域で理解される表現が使われているのは、ある程度、やむを得ないものです。

私は、こういう阿弥陀仏の願いを、現代の社会心理学者、エーリヒ・フロム(1900〜80)の「生きるということ」(原題は、"To have. or to be." 紀伊國屋書店)から、次のように受けとめ直してみています。

フロムは、ドイツに生まれた人ですが、大変深く釈尊の教え、仏教を学び、かみ砕いて近代社会に生きる私たちに、仏教用語を使うことなく、その本質を教えてくれています。彼は、人間が生きるということは、次の二つのあり方で示されるというのです。

一つは、「持つこと(to have)」です。モノを持つ、金を持つ、土地建物(不動産)を持つ、そして、権力(人を支配する力)を持つということです。これは、奪うことと言えるでしょう。その著には、「人間は物を持つばかりでなく、人を所有する、つまり支配することを人間はとても楽しみにして満足を得る」(同著105頁)と指摘しています。

いま一つは、「成ること(to be)」です。フロムは、人間は「持つこと」で自分が満たされるかのように思って努力や工夫をしてきたけれど、果たして、そうではないものを欲求していると指摘しているのです。これらは、与えることと言えるでしょう。

たしかに私たちの文化は、成ることよりも、物を持つことで自分の欲望を満たす言葉や考えを年から年へ、当たり前のこととして見聞きしているので、「成ること」は想像しにくいのかもしれません。それに「「持つこと」は、物に関わりますが、「成ること」は経験することに関わりますから、表現されにくいものです」。(取意、同著125頁)

その著には、次のように示します。

「ところが、自分の都合を求め、他者を顧みず物を所有することを求めるのと同じように、その反対の方向である、他者と結びつきたいと願い、分かち合いたい、犠牲になっても何かを達成したいというように「成ること」を欲求するもの人間は抱えている」(取意、同著141頁)

たくさん持っている人が豊かなのではなく、
たくさん与える人が豊かなのだ(同著141頁)
Not he who has much is rich,
but he who gives much

集中力を身につけるためには、くだらない会話をできるだけ避けることが大事だ…
くだらない会話を避けることに劣らず重要なのが、悪い仲間を避けるこということである(同著141頁)
To learn concentration requires avoiding, as far as possible, trivial conversation, that is, conversation which is not genuine……
Just as it is important to avoid trivial conversation, it is important to avoid bad company

●金子みすゞ「みんなちがってみんないい」

いかがでしょうか。フロムは、さらに、人間は自分の都合にとって価値あるものを色々と「持つこと」に関心を持ち、それを達成しようとして、様々な文化を形成してきたと考える人がいたり、そのように思わされているといいます。これは、迷いに沈む人間が、自分の考えを間違いないなどと捉えるあり方を教える仏教の心が、現代風に示されているように思います。

さて、現代に生きる私も、迷いの人びとを目覚めさせ救い、ついには仏という理想の人格を完成させたものに成らせ、そして、それによってまことの社会を形成させたいという如来さまの願いに生きたいと思います。

その時に、本当の意味で金子みすゞさんの「みんなちがってみんないい」という言葉が心にしみこんできます。それは、真実の世界、如来さまから「お前は、なんと浅い意味で受け止め生きているのではないか」とも聞こえてきます。

スリランカ出身のある大学教授は、「入管という空間は、なんか「気持ち悪い」りんですよ。何も悪いことをしていないし、ビザの更新で来ただけなのに気持ちまで汚れてしまうようなる。非人間的な扱いが凝縮した空間です」「もしウィシュマさん(同施設で死亡)が日本人だったら、外国人だとしても白人だったなら……」(デジタル朝日新聞、2021年07月08日)と日本での非自人の扱を新聞で語っています。改めて如来さまの願いを生きたいと思います。

※「註釈版聖典」は、本願寺出版の「浄土真宗聖典(註釈版)」の略称です。

合掌
万行寺第十八世住職　釋靜芳(本多 靜芳)

※ご縁のあったなた!　第一水曜午後四時から六時の法話会「ナムの会」で「親鸞様・御和讃」を、偶数月第三水曜午後六時半から八時半の「聖典勉強会」で「親鸞様・御手紙」をやびにいらっしゃいませんか?　お待ちしてます(会費はいずれも資料・茶菓代として千円です)。
「ナムの会」は一月と十二月は休会します。